

の重要な拠点となった。

このようにカトリック浜松教会は、リーマンショック以降、緊急的にエスニック・マイノリティの支援拠点となり、未曾有の経済危機を経験した南米系外国人の生活を支援してきた。他に類をみない規模の支援を可能にしたのは、「カトリック教会」という宗教組織の独自性に由来する。カトリックは南米諸国の「制度宗教」であり、日本においては南米系外国人のエスニックコミュニティとしても機能している。また、カトリック教会は日本人と外国人が空間を共にする場であることから、日常的な交流がある。カトリック浜松教会の場合は一九九八年に始まった日本人のホームレスを支援する活動「エスペランサ」がブラジル人信者主導のもとでおこなわれており、そこに日本人信者も参画してきた経緯がある。これらの特性に加え、カトリック浜松教会の場合は、教会信者、他教会・修道会、企業、エスニックコミュニティ、市民など、多方面から物的・経済的支援を取り付けることができるだけのネットワークを有していた。

また、諸支援を可能にする十分な空間資源を有していた。そして最も重要な点は、熱心な信者たちが無償で支援活動に従事したことである。そうすることによって、限られた財源のなかで活動の持続が可能になったのである。

二〇〇九年から二〇一〇年にかけて、徐々に公的な支援体制が整備されはじめたのを契機に、前述したカトリック浜松教会の滞日外国人支援は、二〇一〇年十二月以降、表立ったかたちでは実施されなくなった。いわば、カトリック浜松教会の滞日外国人への支援活動は、「臨時的に制度の隙間を埋める実践」

であった。カトリック浜松教会がもつ「ヒト、カネ、モノ」といった諸資源は、恒常的な滞日外国人の支援拠点となる可能性を十分に備えているが、現時点において支援の恒常化を目指す予定はなく、NPO化する動きもない。他都市では地域の福祉課題に直面していく中で、カトリック教会がNPOの活動拠点となったケースが複数ある。今後の研究においては、NPOの活動拠点となる場合とそうならない場合とで、どのような条件の相違があったかを丁寧に分析していく必要がある。このような課題は残るにせよ、本発表は南米系外国人の「制度宗教」であるカトリック教会が非常時に果たす役割を考察するうえで有益な示唆を提供しているといえるだろう。

パネルの主旨とまとめ

高橋典史

グローバルゼーションが進展している現代の日本社会は、国外から多くの外国人たちが来日して定住・永住を進めているだけでなく、「宗教」も数多く到来するようになっていく。この先、日本社会の側も増加する滞日外国人(移民)の宗教への対応に迫られていくものと考えられる。そこで本パネルでは、外来宗教とそこに集う移民たちのホスト社会への適応のあり方のみならず、ホスト社会側の滞日外国人への対応も取り上げることにし、「移民と宗教」に関する新たな研究の地平を開拓することを目的とした。

まず、高橋典史の発表では、パネルの趣旨と研究上の意義を説明したうえで、現代日本の「移民と宗教」をめぐる状況とその研究動向を検討し、今後取り組んでいくべき研究課題を指摘した。続く星野壮の発表では、東海地方の日系ブラジル人たちが通うペンテコステ派のキリスト教会とエスプリティズモ教団について取り上げた。これらの集団は基本的に閉鎖的なエスニック・チャーチとなっているものの、あえて日本語礼拝に通うペンテコステ派教会の信者や、日本語で子弟たちに教義を教えているエスプリティズモ教団からは、信者たちの信仰継承とホスト社会への適応の志向性を看取できると論じた。

藤野陽平の発表では、東アジアで広範囲に展開している中華系キリスト教会について取り上げた。同教会は、中国発祥ではあるものの、台湾・日本・韓国においてそれぞれ異なる展開をしてきており、台湾人教会、日本人教会、韓国人教会などが形成されてきた。それゆえ、一般的なエスニック・チャーチとは差異があるのだが、それらはあくまで「中華」という枠組みの中での展開であり、こうした宗教集団を捉えるには、地域的なミクロな動きと地域横断的なマクロな動きの双方へのアプローチが求められると指摘した。

最後の白波瀬達也の発表では、ホスト社会側の宗教集団に着目した。二〇〇八年秋に起こったリーマン・ショックの影響で日系ブラジル人をはじめとする滞日外国人の多くは失業し、極度の経済難に陥った。そのため、カトリック浜松教会では、比較的大規模な空間資源、人的資源、行政や教育機関とのネットワーク等を活用して、外国人住民への支援を展開した。そし

て、緊急的な外国人支援の拠点として同教会が有効に機能した一方で、臨時的に制度の隙間を埋める役割をするという自己認識や、NPO活動等に展開することへの関心が低いといった要因から、恒常的な外国人支援という側面は強くはないと論じた。

以上の発表ののち、中牧弘允氏よりコメントをいただいた。中牧氏は「ニューカマーと宗教」という新しい研究テーマへの試みとして、本パネルの意義を評価したうえで、次のような今後の課題を指摘した。(一)外国人が集住する「都市」だけでなく、よりミクロな「地域」に着目することで日本人住民との関係性を把握すること、(二)ニューカマーのあいだでペンテコステ派教会が支持されている要因を分析すること、(三)カトリック教会などの「見える教会」内における既存の日本人信者とニューカマーの信者との関係性を把握すること、(四)日系新宗教におけるニューカマーの信者と各事例との比較を行うこと、などである。さらにフロアからは、移民たちの出自国の宗教状況を視野に入れて日本の事例を分析することや、ペンテコステ派教会が熱心に行っている海外宣教も視野に入れる必要性などが提起された。